

減の213万8,000トンで3カ月ぶりに減となった。鋼種別生産では普通鋼が同2%減の710万6,000トンと2カ月ぶりの減となり、特殊鋼は同5%増の213万7,000トンと15カ月連続で増加した。

この9月生産の結果、2014年度上期(4~9月)の粗鋼生産量は前年同期比0.5%減の5,555万6,000トンとなった。消費増税後の反動減が懸念されたが、鉄鋼生産には大きな影響はなく、年率1億1,100万トンの高生産が続いた。上期の炉別生産は、転炉鋼が前年同期比1.0%減の4,289万トン、電炉鋼が同1.2%増の1,265万5,000トンであった、鋼種別では普通鋼が1.4%減の4,282万9,000トン、特殊鋼が2.7%増の1,272万7,000トンであった。

財務省が発表した9月の鉄鋼貿易統計によると、輸出(全鉄鋼ベース)は前年同月比7.4%増の370万9,000トンとなり、13カ月ぶりに増加した。高炉メーカーが昨年以降海外に建設した自動車鋼板用の冷延や表面処理鋼板ライン向けの原板輸出の増加による。一方、全鉄鋼輸入は前年同月比33.4%増の76万1,800トンと11カ月連続で前年を上回っており、増勢が続いている。アジアを中心とした海外市況が低迷しており、割高な日本マーケットに進出している側面が強い。

向け先別輸出内訳は、アジアが前年同月比3.0%増の286万4,000トン、そのうち景気減速が伝えられる中国は1.5%減の50万3,000トン、NIE'sは2.6%増の103万9,000トン、ASEANが5.6%減の107万9,000トンとなっている。そのほか、中東向けが24.6%増の13万2,000トン、米国向けが32.4%増の24万トンと前年水準を大幅に上回った。一方、国・地域別輸入内訳はアジアが前年同月比31.6%増の61万8,700トン、このうち中国からが62.0%増の15万7,100トン、NIE'sからが25.5%増の41万9,100トン、ASEANからがほぼ倍増の1万4,900トンとなっている。

9月の鉄鋼貿易統計の結果、2014年度上半期(4~9月)の鉄鋼貿易で、全鉄鋼輸出は前年同期比3.9%減の2,081万8,000トンとなった。高炉を中心に定期修理が多かったうえ、国内需要の堅調で輸出余力が少なかったこと、さらにタイをはじめとする東南アジアの景気減速が影響し、上期としては3年ぶりの減少となる。全鉄鋼輸入は同22.6%増の436万5,400トンで、2005年の425万9,000トンを抜き、過去最高を記録した。国内ミルの生産がタイトであった中、中国の過剰生産・輸出増加の影響が大きい。

◆10~12月粗鋼需要、2,798万トン——経産省見通し

経済産業省が発表した2014年度第3四半期(10~12月)の出荷相当粗鋼需要量は2,798万トンで、前期比0.1%減と3四半期ぶりの減、前年同期比では0.6%減と7期ぶりに減少する。鋼材需要は、国内が前期比0.9%増、前年同期比2.8%減の1,639万トン、輸出は前期比3.4%減、前年同期比5.2%増の852万トンとなり、合計ではそれぞれ0.6%減、0.2%減の2,482万トンとなる。

第3四半期の国内普通鋼鋼材の需要を分野別にみると、建設では公共土木需要が高水準だった前年同期比で1.8%減るが、上期前倒し発注の影響で前期比では2.9%増える。民間土木需要は前期比5.6%増、前年同期比2.1%増と見通している。住宅建築需要は前年同期比では16.6%減となるが、前期比では1.3%増える。非住宅需要は商業施設や事務所は不振ながら、堅調な物流倉庫に支えられて前期比0.6%増、前年同期比2.2%増の見通しとなっている。製造業では、造船起工量が前期比1.5%増、前年同期比1.8%増の見通しとしている。自動車は、消費増税の駆け込み需要の反動などで完成車が前期比0.8%減、前年同期比5.0%減とみている。完成車輸出は前期比微増、前年同期比微減、ノックダウンセットの輸出は前期比1.8%増、前年同期比1.2%減と想定している。

さらに、第3四半期の普通鋼輸出は、前年同期比では3.4%増となるものの、前期比では2.9%減と2期ぶりに減る。エネルギー案件の物件の出方などが影響するが、足元の急激な円安の動向によっては、輸出に影響する可能性がある。

当見通しによると、2014暦年の粗鋼生産は1億1,122万と前年比0.6%増加する。5年ぶりに1億1,000万トンに達した前年に続いて、今年も1億1,000万トンを超す。

◆2014年世界鋼材需要、2%増——WSA見通し

世界鉄鋼協会(WSA)は、10月6日モスクワで年次総会を開催したが、事務局は席上2014年及び2015年の世界鋼材需要見通しを発表した。それによると、2014年の鋼材見掛け消費は前年比2.0%増の15億6,200万トンとなり、2015年は同じく前年比2.0%増の15億9,400万トンとみている。

表-1 世界の鋼材見掛け消費量見通し

(単位:100万トン、カッコ内は前年比増減率%)

	2014年	2015年
EU27カ国	146 (4.0)	150 (2.9)
その他欧州	38 (1.9)	39 (3.8)
CIS	57 (△3.8)	58 (1.9)
NAFTA	138 (6.4)	141 (2.2)
中南米	48 (△2.4)	50 (3.4)
アフリカ	35 (2.8)	37 (8.0)
中東	52 (2.3)	55 (6.0)
アジア・オセアニア	1,050 (1.7)	1,064 (1.4)
中国	748 (1.0)	754 (0.8)
世界計	1,562 (2.0)	1,594 (2.0)
中国以外	814 (3.0)	840 (3.2)

(資料)世界鉄鋼協会 作成

中国の需要は、2014年には前年比1.0%増の7億4,800万トン、2015年は同0.8%増の7億5,400万トンと見通している。不動産部門の引き締めの影響で、2013年の同6.1%増に比して低成長に止まる。インドの需要は、2014年が前年比3.4%増の7,620万トンとなり、2013年の1.8%増を上回る。2015年も新政府による構造改革や回復期待の持続から6%増と高い伸びが続くが、インフレや財政再建が下振れリスクと指摘している。

日本の需要は、2014年が前年比2.3%増の6,680万トンと見込み、2013年の同比2.1%増とほぼ同様な伸びと見ている。2015年はアベノミクス効果が薄れ、消費増税などの影響で需要は1.5%減に転じると見ている。米国の需要は、2013年には前年比0.4%減だったが、2014年は自動車、エネルギーを牽引役に6.7%増に転じ、1億220万トンと見込んでいる。2015年も1.9%伸びる見通しとしている。

EU28カ国の需要は、2013年の0.8%増に対して2014年は多くの国で需要産業が回復する予想され4%増の1億4,590万トンと見ている。2015年は2.9%増を見込んでいる。CIS(旧ソ連)の需要は、ロシアとウクライナの紛争の影響で2014年には3.8%減の5,700万トンと見込んでいる。2015年には1.9%増に転じると見ている。ブラジルの需要は、2014年にはインフレや労務コストの高騰が成長を阻害し前年比4.1%減の2,530万トンと見ている。2015年には1.5%増に転じるとしている。

中国以外の国の需要総量は、2014年には前年比3.0%増の8億1,400万トン、2015年には3.2%増の8億4,000万トンと2年連続で3%増を達成すると見ている。 □